

日秀上人のおもかげ

—その補陀洛渡海行—

神野富一

一 琉球に漂着した補陀洛渡海僧

十六世紀、日本は戦国乱世であった。争乱が頻発し、厭世的な気分も社会に充満したその時代にこそ、一葉の船に身を預けて南方海上にあると信じられたフダラク山への到達をめざすというフダラク渡海行者たちもまた続出した。たとえば熊野那智の補陀洛山寺の渡海上人たちを記録する『熊野年代記』によれば、九世紀から十八世紀にわたる渡海二〇例が録されているうち、九例までがその十六世紀に属する。他の渡海史料を考え合わせても、現存史料による限りでは、フダラク渡海のピークは十六世紀にあったといつてよいかもしれない。

上野国の出身であり、高野山で修行したという日秀上人もまたまさにその時代の渡海行者の一人であった。しかも熊野那智から渡海した蓋然性が高い。そして数ある渡海行の中で日秀の場合に特異なのは、渡海の結末やその後の行状が知られている点にある。客観的には自殺行にもひとしい渡海行の結末は、ことの性質上、伝説は別にして、ほとんど誰も知ることはないし誰にも知られることはない。ところが日秀の場合は、ただ一人かなり詳しく渡海の模様やその後の行状が伝えられている。それは、おそらくは那智から出帆した彼の船が、偶然にも琉球国に漂着したためである。彼は琉球で民衆や国王を迎えられ敬われ、造寺造仏や布教に尽力した。後に薩摩に渡り、やはり土地の大名島津氏の重んずるところとなって活躍し、かの地で没した。後に書かれた数種の伝記類、その他若干残された史料がそうした彼の

事跡や生涯をかなり詳しく伝えており、それらによって彼の実人生の再構成もある程度は可能な状況にある。

そしてこの日秀の伝記研究は、近年根井浄氏によって詳細に行われたところである。その分厚い『補陀洛渡海史』(二〇〇一年)中、史料も含めれば一二〇ページ余がそれに費やされ、ただ詳細というばかりでなく、厳密な史料批判、史料操作によって内容的にも従来の日秀上人研究の水準を大幅に引き上げたと評されよう。本稿も以後の記述においてこの書に負うところが大きい。

さてこうして日秀上人の事跡がある程度見通せるようになった現在の段階で、あらためて興味がもたれるのは、生きて補陀洛渡海を経験し終えた人間の精神面である。フダラク渡海という異常な経験の果て、人は何を見るものか、日秀は何を思っただったか。そのような関心において、ここでは特に日秀にとっても人生のクライマックスであったはずの琉球漂着に焦点をあて、その模様、日秀のフダラク観、合わせて日秀を受け入れた側の人々のことについて考えてみたい。

二 琉球の金武をフダラクと観ずる

琉球側の文献で日秀上人の事跡についてもっともまとまった記述をもつのは『琉球国旧記』(雍正九年(一七三二)成立)巻七の「波上山三社」の附記で、その誕生から入寂までを描き、小「日秀上人伝」の体をなす。それによれば日秀の琉球漂着とそれまでのありさまは次のようであった。

加賀国大守、姓世名富樫、其生一子。是乃日秀上人也。其年十九歳、殺_レ人害_レ命。然後、日則生_レ懺悔之思、夜則長_レ無常之心。已_レ発_レ菩提之大願、遂志_レ解脱之大道。潜出_レ城外、深隱_レ山中、遂尋_レ師登_レ高野山。

幸遇_レ高僧_レ師之、剃_レ髮改_レ衣。而発_レ心勇猛、修行精進、終得_レ密法奥旨、深究_レ兩部源底。于是欲_レ補陀落、乘_レ槎不_レ用_レ槽、泛_レ海隨_レ波、流雲游_レ洋面、漂蕩天外。竟到_レ琉球国、金武郡属地、富花津。

其夜国王、忽見_レ毫光四射、有一僧_レ自_レ天而降。良久而醒、便是一奇夢也。国王甚疑_レ之。明朝果有_レ人、奏_レ聞上人漂到之事。国王便遣_レ使崇_レ之。

既而上人、扞_レ地于金武村、創建小宮、作_レ弥陀・薬師・正観音三尊、以為_レ権現正体。其靈験数_レ応。国王聞_レ之、以為_レ上人功德。遂欲_レ長留_レ琉球。而遣_レ使請_レ上人来_レ京都。(以下略)

その親は加賀国大守の富樫氏で、日秀上人はその一子として生まれたが、十九歳のとき人を殺め、それが発心の契機となって家出し、やがて高野山に登り、高僧の弟子となって出家した。以来修行に励み、真言密教の奥義を究めたという。上人の出身地については、『旧記』に先立つ『琉球国由来記』(康熙五二年一七一三)成立)巻十一や後述の薩摩側資料に「上野国」とあるのが信憑性に富む。「加賀国」は誤伝であろう。

さて上人はやがてフダラク渡海を企て、槎に乗り、槽は用いず、海に泛んで波のまにまに、流雲のごとく洋上に漂い、天外にまで漂蕩し、ついに琉球国金武郡の富花津に到ったという。上陸した上人は、金武村に土地を扞び、小宮を創建し、弥陀・薬師・正観音の三尊を熊野権現の正体として作った。その靈験はしばしばであったという。この辺の『旧記』の記述は簡単だが、『由来記』の方には金武郡漂着の際の上人の心理が劇的に述べられている。同巻十一所収の「金峰山補陀落院観音寺縁起」に、金武郡富花津に漂着した上人は、「上人自ら心を安んじ、歎きて曰く、誠に補陀落山たることを知る。又何所に行き、之を求めんや。錫を留めて安住せん」と言ったとある。フダラク山を目指して渡海を敢行した上人が、漂着した琉球国の金武をそのフダラク山と認め、そこに安住することを決意したというのである。上人は中でもその地の深い洞窟にこそ観音の住処を見出し、そのそばに宮を建

て、熊野三所権現の正体たる三尊を自ら彫ったと続いて述べられているが、この「縁起」の内容については後でより詳しく検討してみたい。

日秀のフダラク観を採るためには、同じく『由来記』巻十一の「波上山護国寺」の項にも史料がある。日秀は那覇の海岸の崖上に波上山三所権現(波上山護国寺と一体)を再興し、本尊を自ら刻んで宮におさめたが、その「軸銘」末尾に「日本上野国住侶渡海行者広大円満無礙大悲大願日秀上人随縁正衆_{「下カ」}松々子 大明嘉靖二十三年(一五四四)甲辰十二月大吉日敬白」とあるというのである。「日本上野国住侶渡海行者」には日秀自身の自己規定がうかがえよう。そしてこの自己規定は、後年まで持続したことが次の史料から知られる。

日秀は琉球に滞在して活躍した後、薩摩におもむき、そこでも島津氏に迎えられて活躍し、その地で没したのだが、その薩摩側の一史料、「日新公御譜」に次のようにある。

有_レ称_レ日秀上人之貴僧。先是既渡_レ補陀洛、而天之未_レ喪也。扁舟不_レ至覆没、身体亦不_レ死亡、遂到_レ琉球国之二浦矣。国人謂_レ奇異靈妙、無_レ貴無_レ賤老若男女莫_レ不_レ宗敬者。然而不_レ欲_レ終_レ其身於夫国也。又赴_レ日域_レ渡薩州坊津来。而後如意珠山一乘院中殿堂閣舍補_レ已破。興未_レ足、以_レ琉球国之珍材。不_レ亦奇乎。且復請_レ建立_レ一多宝塔、安置_レ五仏。是亦予之所以素願也。匪_レ畜容焉。所_レ帰依_レ実以_レ厚矣。當作_レ粧嚴既成、則令_レ現住頼忠法印、写_レ其銘於各仏体心柱。如左。

阿闍如来 大檀那島津藤原朝臣左兵衛尉尚久

宝生如来 大檀那島津藤原朝臣三州太守貴久

大日如来 大檀那島津藤原朝臣忠良

法名梅岳常潤大和尚

阿弥陀如来 檀那頼娃左馬尉兼堅

积迦如来 檀那曾山入道道珍坊津之住人

本願日秀上人。從_レ補陀洛_レ来作_レ之。

上野国住人

天文廿四年乙卯十月十二日

「日新公」は記事中に「大檀那」の一人としてみえる島津忠良、「日新公御譜」はこの人の記録である。天文廿四年は西暦一五五五年、むろん日秀在世中であり、この史料は日秀の活動をすぐそばで、リアルタイムで記録したものとしてもっとも貴重である。

忠良は日秀を「貴僧」とまず敬っている。そして伝聞か、あるいは直接の聴取によったか、日秀のフダラク渡海行について、天の意志によってその小船は転覆せず身体も死なず、「琉球国の一浦」にたどり着いたと簡潔に紹介している。琉球国の人々は日秀その人やその活動を奇異霊妙だとして、貴賤老若男女宗敬しない者はなかった。けれども日秀はその国で生涯を終えることを望まず、日域の薩州坊津に渡り来たった。そして坊津の一乗院の殿堂閣舎が破れていたのを補修したが、材木の足りない分は奇特にも琉球国の珍材を取り寄せて使った。次いで日秀は一乗院に多宝塔を建立して五仏を安置したいと忠良に請うてきた。それは忠良自身の強い素願でもあったので許した。そして多宝塔の當作粧嚴すでに成ったので、一乗院の現住頼忠法印に命じて五仏の仏体の心柱それぞれに銘を書かせた、として、その銘文を書き留めている。その最後に、「本願日秀上人。補陀洛より来たりて之を作る。上野国住人」としるされた。史料によれば、この一行には「釈迦如来の心柱に書き付けられた」という意味の朱書きの注が付されている。日秀の郷里が上野国であったことは、先の波上山三所権現本尊軸銘末尾の「日本上野国住侶」とともにこれでたしかだし、そして「本願日秀上人、補陀洛より来たりて之を作る」という一文にはまるでその肉声を聞くように、琉球が補陀洛そのものだったという日秀自身の認識をうかがうことができる。自署に近いその署名に、生国のほかには「補陀洛より来たりて」とだけわざわざ書き付けたのだ。これによって、長年すごした琉球（中でも金武）がフダラクそのものだったということは、日秀自身のゆるぎない確信であり、覚悟・表明であり、いわば日秀自身の存在証明でもあったと知られる。周囲の人々も日秀のその表明を畏敬とともに許容したわけだろう。

漂着した金武をフダラクと観じたという日秀は、こうして薩摩に渡ってからその認識を強固に持続している。史料の読みの問題としては、こうして生前の「日新公御譜」にこのようにあることによって逆に琉球側史料、「金峰山補陀落院観音寺

縁起」（『由来記』所収）の内容の信憑性が高まることになる。その「縁起」にいう、日秀が漂着した金武をフダラクと観じたということは真実であった可能性が強い。

そこで、「金峰山補陀落院観音寺縁起」の内容をあらためて検討する段になるが、その前に、日秀金武漂着時のイメージ形成のためにも、その漂着の年次と年齢の問題にふれておく必要がある。

三 金武漂着時の年次と年齢

日秀の渡海年次については、早いころの伝記、『開山日秀上人行状記』に永禄初年（一五五八）とし、その影響下にある『日秀上人縁起』や『三国名勝図会』（天保十四年一八四三）成立）には「永禄元龜の間」（一五五八一五七三）とする。ところが、琉球側史料にはもっと早い年代の日秀の事跡が多くしるされている。『琉球国由来記』の巻十一では、「金峰山補陀落院観音寺縁起」には金武郡富花津漂着の年代を「尚清聖主御宇」（一五二七年一五五五年）、「嘉靖年中」（一五二二年一五六六年）としているが、「波上山護国寺」の項には波上山三所権現再興を嘉靖元年（一五二二）、開聞山正一位権現の勧請を同二年、大日如来堂建立を同三年と伝えている。琉球国最初の史書『中山世鑑』（慶安三年一六五〇）成立）を継いで王国の歴史をしるした『中山世譜』（雍正三年一七二五）重訂）巻六には、尚真王代の正徳年間（一五〇六一五二二）のこととして「日本僧日秀上人、流れに随ひて国に至る。自ら社宮を金武村に建つ」とある。ただし、割注に「観音寺は何代何年に之を建つるか、今考ふべからず」とあり、金武の権現社と観音寺の建立を区別して扱っている。この伝えはやはり編年体の史書である『球陽』（乾隆十年一七四五）成立）巻三にもとられたところだ。『球陽』には他にも尚真王代の四十三年（一五一九）、四十六年、四十八年各条に那覇や首里における日秀の事跡をしるす。ただし、日秀滞琉についての史料のうちで年次がもっとも確実なのは、先述した『由来記』巻十一、波上山三所権現本尊軸銘末尾の「大明嘉靖二十三年（一五四四）甲辰十二月」であろう。これらを含め、年次記載のある琉球側史料

を逐一検討した根井浄氏は、琉球漂着の年次を正徳十六年（一五二二）から嘉靖元年（一五二二）ごろとみている。永禄初年などの伝えは誤伝とみてよいだろう。

しかしながら琉球漂着の年次を仮に正徳十六年（一五二二）ごろとみる場合、今度は日秀の年齢が大いに問題となってくる。日秀の生没年もまた一問題なのだが、没年については『開山日秀上人行状記』が天正三年、七十三歳で入定、入寂はその三年後（一五七七）とし、『三国名勝図会』も天正五年入寂、時に年七十五歳とする。すると生年は文亀三年（一五〇三）であったことになる。そのほかに日秀の没年次の年齢がしるされた史料は見あたらない。一方、どの伝記類も、日秀が十九歳の時、家出、あるいは高野山で出家、修行に精励したことをしるしている。かりに文亀三年に生まれ、十九歳で出家したとすれば、出家は正徳十六年のこととなり、ちょうど琉球漂着推定年次に重なってしまう。つまり、高野山での修行期間がほとんどなかったことになる。

『琉球国旧記』に「遂尋師登高野山。幸遇高僧師之、剃髮改衣。而発心勇猛、修行精進、終得密法奥旨、深究両部源底」とあったように、伝記類には必ず高野山での修行精進が述べられている。「終に密法の奥旨を得、深く両部の源底を究む」にはあるいは僧伝にはありがちな誇張がまじっているかもしれないが、しかし日秀の琉球および薩摩における仏教者としての活動、とりわけおびただしい造寺造仏の事跡を知るとき、高野山を主たる場とした修行精進は仏工技術の習得も含めて相当な期間に及んだはずだ、とおのずから考えられる。日秀は高野山で修行においても仏工技術においてもかなりの段階に到達したはずで、それであれば渡海も琉球漂着以後の盛んな活動もありえなかつただろう。十九歳での渡海、はいかにも不自然なのだ。

この奇妙な矛盾には、二通りの解しかあるまい。一つは天正五年（一五七七）没時に七十五歳であったという伝承を疑うことである。この伝承の出所は『開山日秀上人行状記』あたりらしいが、この書は琉球漂着を永禄初年（一五五八）と大幅に誤っていた。またもつとも信頼できる在世中の記録、「日新公御譜」に「然して其の身を夫の国に終ふることを欲せず、又日域に赴きて薩州坊津に渡り來たる」と、死地を求めるつもりがあつて薩摩に渡つてきたような書きぶりが見られるのも多少

気にかかる。この文意をそう汲み取るべきなら、多少主観的だが、その時日秀はあ程度の高齢に達していたかと思われるからである。日秀の薩摩渡航は、「日新公御譜」の天文廿四年（一五五五）よりはいくらか前と考えられ、『三国名勝図会』には天文廿年（一五五一）ごろに正護寺を創建したことがみえるから、仮に一五五〇年くらいに死地を求めるつもりもあつて薩摩渡航がなされたとすれば、日秀の生年は文亀三年（一五〇三）よりもつと以前だったかもしれない。

もう一つの解は、琉球漂着の年次を正徳十六年（一五二二）よりも後ではないかと見直してみることである。先述のように琉球側史料には早いころからの多くの事跡がしるされているのだが、しかし中で確実なものは波上山三所権現本尊軸銘末尾の「大明嘉靖二十三年（一五四四）」くらいで、それ以前については『由来記』『中山世譜』『球陽』の年次記載については、王府内での編纂作業において日秀また金武の権現社や観音寺に関する多分に伝承性を含んだ断片的な史料を整合させ、また編年するために机上の操作が行われた可能性も皆無とはいえない。次節にいうが、その内容がある程度の信憑性をもつと考えられる「金峰山補陀落院観音寺縁起」『由来記』に、漂着の年次を「尚清聖主御宇」（一五二七年、一五五五年）としているのも気にかかるところだ。

矛盾を解く二つの解について、しかし私は今のところどちらともさだめかねている。ただ、日秀が十九歳で家出して修行精進した後、渡海して金武に漂着した時には、その年次は不明だとしても、もう初々しい青年僧の姿ではなかつたということだけは信じられる。

四 「金峰山補陀落院観音寺縁起」を読む

南瞻部州中山国、金武郡金武村、金峰山三所大権現者、弥陀・薬師・正観音也。日秀上人自作。

按 開基、封尚清聖主御宇、嘉靖年中、日域比丘日秀上人、修行三密、終而欲趣補陀落山、随五点般若、無前期到彼郡中富花津。上人自安心、歎曰、

「誠知、為補陀落山。又行何所、求之耶。留錫安住。幸哉、此地靈也。向北方者、似蓬來、有富登嶽。衆峰羅立、似兒孫。前有大湖、名池原。日洗塵垢、浮般若船、松樹竹塢月、照三転四徳圃。実相実有春花、開幽窓、自性本有、造化無不現。峒窟無窮。按、天有一門、不所及人力。靈跡不可學、靈驗不可說。大悲呼有応。此洞者、龍宮千里、誰知根源哉」。

上人爰刻彼三尊、建宮、奉崇權現正体也。

『琉球国由来記』二十一卷は尚敬王の命により首里王府で編纂された琉球国の総合的な地誌であり、宗教・祭祀関連記事の分量の多いことが一特色をなす。康熙五十二年（一七一三）に成立した。その巻十一には「密門諸寺縁起」をしるすが、その「金峰山観音寺」の項に「金峰山補陀落院観音寺縁起」は収められている（以下、「縁起」ともいう）。そしてこの縁起文の後に、観音寺のたどった歴史いくばくかの叙述と「中興」以後の歴代住持十七人の記名があり、末尾に「大清康熙五十二年癸巳霜月吉旦 観音寺現住頼仁」と署名がある。つまりこれは、王府の命によって『由来記』編纂のため康熙五十二年霜月に観音寺の現住であった頼仁がしるし、王府に提出された資料であったことがわかる。しかし、「縁起」の部分が頼仁の作文であるのか、それとも過去にまとめられたものであるのかということは、形式上はいちおう不明である。

その観音寺の歴史をしるす部分には、摘要すればおおよそ次のようなことが書き留められている。

- ① 開山は日秀上人であること。
- ② いったん中絶し、後に禅宗の寺となったが、それも衰えたこと。
- ③ 康熙元年（一六六二）十二月、詔勅によって再び「秘密大乘之門林」とされたこと。

④ 康熙三十八年（一六九九）、慧朗が住職である時、古仏を「撥遣」して（除きやって）新しく紫磨金の本尊、弥陀・薬師・正観音を請うた。またその翌年から翌々年にかけて、それまで廃れていた寺を新しく造営したこと。

これによれば、日秀の後、寺はいつの頃か中絶、一時禅宗の寺となったがそれも

衰え、日秀開山より百数十年後に再び真言密教の寺とされ、やがて再興されたといった経緯をたどっている。外面的には、少なくとも寺院内部において開山上人の記憶や記録が代々大事に伝承されていったという事情にはななかったことがわかる。けれども、それにしても「縁起」の内容は漂着の折の日秀の言葉（思い）を中心に語っており、しかもその言葉は先の「補陀洛より来たる」という後年の自意識に正確に見合っている。さらにこの「縁起」には、「上人」という尊号は別にして、他の日秀の伝記類にみられるような他者からする日秀讃仰の言葉がない。そこで「縁起」作成の資料として日秀自身が書き残したものがあつたかとも疑われるほどだが、それはなお憶測にすぎないとして、しばらくその内容に耳を傾け、日秀のフダラク観を探るよすがとしたい。なお、④に康熙三十八年に本尊の古仏を除きやって新しく紫磨金の三仏に置き換えたといい、一方「縁起」の方には本尊を「日秀上人自作」とすることからみれば、

「縁起」は康熙三十八年より以前の制作かと推定される。

まず寺名だが、「金峰山補陀落院観音寺」は、そこが観音いますフダラクの寺であることを示し、日秀の開山以来の思想が継承されているといえる。「金峰山」という山号は「金武」の地名に吉野の「金峰山」が重ねられたものだろう。日秀漂着以前から地名「金武」が存在したことは、尚真王代の弘治十四年（一五〇一）に第二尚氏の墓陵として築造された玉陵の碑文に「きんのあんし まさふろかね」（金武按司真三良金）と刻



金武 観音寺

されていること、またおそらくは按司時代に歌われたオモロ(神歌)に「金武の世の主」(『おもろさうし』巻十七・一)がみえることよって明らかである。⁶⁾日秀は漂着した土地が「金武」であることを知って、同音の吉野の「金峰山」を連想し、建立した寺をそこになぞらえたのではないか。⁷⁾日秀の伝記類に高野山は登場しても吉野は語られないが、しかし日秀が熊野信仰の鼓吹者であったことは当の観音寺や波上における三所権現の造仏などに顕著であり、渡海もまた熊野那智の信仰によるだろう。合わせて金胎両部曼荼羅にもなぞらえられたように、修験道において一体とされた吉野と熊野の信仰を思えば、山号に「金峰山」が選ばれても不思議はない。

「縁起」の内容に入ろう。金武郡富花津漂着の年次については先にふれた。「三密の修行」とは、行者が身に印契を結び、口に真言を唱え、心に本尊を観ずることよって仏と一体になり即身成仏を目指す、密教において基本となる修行のことである。「五点」は「五転」に同じく、真言密教の行者の菩提心の境位が発心(因)・修行(行)・菩提(証)・涅槃(入)・方便究竟(方便)の五位に転生しつつしだいに高まっていくことをいうが、「五点般若に随ふ」⁸⁾はここでは日秀が「東方修行」の次に「南方」に「証菩提」を求めて南海へ舟行したことを意味するかと思われる。

さてフダラクへの渡海を志した日秀は正体もおぼえず金武郡中の富花津に漂着したという。富花津は現在の福花の海岸、億首川(福花川)の河口付近にあった港である。「縁起」のこの辺りの叙述は簡略だが、『開山日秀上人行状記』には、

或る時、発願して曰く、娑婆界の塵を去りて頓て補陀洛の淨刹に到らんと欲す。故に一扁舟を求め、櫓は莫く棹は莫く、手に香炉を採つて漫々たる海上に泛かぶ。自から風波の流蕩に任せ、則ち大洋の頂に到る。舟底の櫛、抜ける時、鮑魚、孔穴を塞ぎ、少しも潮水入ることを得ず。然るに昼夜止まらずして、南方に向ひ流る。竟に琉球国に着く也。(中略)果して歳は永祿初年元戊午に次る、那覇津において、異相の僧遽然として一葉に乗して来る。舟中を閲するに惟だ三衣一鉢也。元より数旬の間、穀漿は無く命を支ゆ。然りと雖も顔炎は人に過ぐ。⁹⁾

とある。後の『日秀上人縁起』や『日秀上人行状記』の叙述もこの範囲を出ない。

「櫓は莫く棹は莫く、手に香炉を採つて漫々たる海上に泛かぶ」はすべてを観音の意志にゆだねた上人の姿を印象づけている。鮑が船底の穴を塞いで舟が沈まなかつたというエピソードは説話とみればそれまでだが、そのユニークさにおいてはもともと

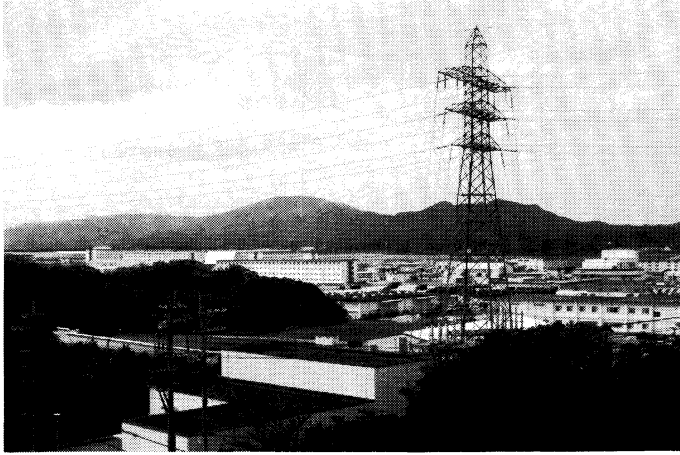
になった事実の存在が思われなでもない。実際、その鮑が宝物の一つとして薩摩の三光院(現日秀神社)に伝来している」と『三国名勝図会』にはいい、それは現在にまで伝世している。『開山日秀上人行状記』のこの段落は、そのままではないにしてもとは日秀自身の語り

に発している部分があるのかもしれない。しかし、「果して歳は永祿初年元戊午に次る」以下は日秀を迎える中山王の側に立った創作的な叙述であり、漂着した舟中にはただ最小限の三衣一鉢あるのみ、数十日の断食にもかかわらず求道の意志に燃えて顔はほてっていたというあたりの日秀の姿はむしろ颯爽としている。

『慶長見聞録案紙』には、また別の日秀像がある。「那智浦よりうつほ舟を作り、外より戸を打付させ、風に引れて七日七夜ゆられて、琉球国え流寄る」。続いて漂着時のようすを、「浦の者共、此舟を引上て見るに、聖人あり、取出し魚鳥をあたふなどしけれども不喰、又美女をあはせけれども精進看経斗也」とリアルに描き出している。『慶長見聞録案紙』のこの部分は、玄蘇という僧が琉球諸島の事情について成した「八島の記」を引用したもので、それはまた後に伴信友の『中外経緯伝草稿』に引用されたことがすでに根井浄氏の研究(『補陀落渡海史』)によって明らか



福花の海岸 億首川河口付近



ブート岳（右側の山）手前は米軍基地



鍾乳洞（ティラスフチ）の開口部

かにされている。それによれば玄蘇は博多や宗像郡にあつて朝鮮外交に活躍した臨濟宗の僧侶であり、天文六年（一五三七）の生まれで日秀の生きた時代に重なる。「玄蘇は琉球の海から聞こえてくる日秀上人の情報を持つていたかも知れない」と根井氏は推測しているが、いずれにしても従来は後世の『中外経緯伝草稿』に頼っていたこの記事が、日秀とほぼ同時代人の証言としての意味をもつことになった。ただし引用した部分は、「うつほ舟」「外より戸を打付させ」「七日七夜」などある智定房や『台記』所載の渡海伝承にも通い、伝聞の間に定型化されたきらいがあり、同時代史料だからといって鵜呑みにはできない。「美女をあはせけれども精進看経斗也」に続いては「久敷居る儘、詞通し仏法をす、め、又為朝の子孫来り、日本人とて崇敬し弟子となる」とある。いかにもありそうなおもしろい話で、日秀は漂着後言葉の問題はどうしたのかといった関心には応えてくれる。

「縁起」の方は、もつぱら漂着時の日秀自身の感動を伝えている。「上人自ら心を安んじ、歎きて曰く、誠に補陀落山たることを知る。又何所に行き、之を求めんや。錫を留めて安住せん。幸なるかな、此の地靈なり。……」として、山・湖・洞窟のようすを仏の世界の現れとして順に描いていく。

「北方には富登嶽があつて蓬萊山に似ている。衆峰がつらなり立ち、児孫のようだ」。「富登嶽」は現在の「ブート岳」で標高二二四メートル、観音寺からは北西方向四キロ足らずに位置する。その東西には屋嘉岳・恩納岳・ザン岳・一ツ岳・テイト岳などが連なり、「児孫のよう」はその形容だ。

「前には池原という名の大湖があり、そこでは日光が煩惱を洗い流し、生死の海を渡る智慧の船を浮かべ、松樹や竹の堰堤にかかる月は、三転（釈尊が四諦を説くに用いた三つの段階）や四徳（涅槃に備わる四つの徳）を具現している園を照らし出している」。「池原という名の大湖」は、金武の南側に広がる「湖の

ように静かな金武湾（『金武町誌』のことかとも思われたが、しかし観音寺の北側の丘陵台地にかつて存在した大池を指す。観音寺の北西に接して「池原（イチバル）」、またその北側に「池久保原（イチクバル）」と「池」を含む小字名が今に残っており、「池久保原」の北側の「長地原（ナガチバル）」には湿地帯も認められる。二〇〇五年現在、それらの小字はいずれも米軍のキャンプ・ハンセン内にあつて調査はできないが、郷土誌によれば、金武町北側の丘陵台地一帯を広く占有しているキャンプ・ハンセンの地域は昔は大きな池であり、一五〇年前に干拓によって広大な池原の農耕地となったという（『金武町誌』）。往時、観音寺の北ないし北西には大池が広がり、その向こうに「富登嶽」を望むような景観が実在したのだ。大池には船も浮かび、松林や竹を植えた堰堤もみられたのだらう。

「真実在を現す春の花は静かな窓を開かせ、あらゆるものが本来不生不滅でそれ自身で存在するという真理は、この造化が現しているのだ」。「熊野年代記」にみえる渡海上人の記録によれば、九世紀から十六世紀までの十三例の渡海記録中、十一月の渡海が十一例、十二月・二月

のそれが各一例であり、渡海の月は十一月に集中している。もし日秀も十一月に渡海したとすれば、数十日後の琉球では亜熱帯性の「春の花」が咲き誇っていたであろう。

「洞窟は無窮の深さだ。思うに、天には一門があるが、それは人が到れるような所ではない。霊跡・霊験は無数にある。観音は呼べば応じてくれる。この洞窟は千里の先に龍宮に通じているが、誰もその根源を知らない」。「按、天有一門、不_レ所_レ及人力」の一文はよく読み解けない。この洞窟は観音寺境内の東脇に開口する長さ約一七〇メートルのみごとな鍾乳洞で、開口部にはグスク時代の遺跡も確認されている。地元ではティラヌフチと呼ばれている。「金武の寺の窪地がティラであり、そこに発達した鍾乳洞がフチである」(『並里区誌』)。ティラヌフチは日秀以前からの呼称であり、そこが琉球の言葉でティラと呼ばれる拝所であったことが、日秀がこの洞窟のそばに「寺」を営む一因となったかもしれない。

「そのように上人は観じて、弥陀・薬師・正観音の三尊を自ら刻み、宮を建て、三尊を熊野権現の正体として崇め祀った」。金武宮および観音寺の建立とみてよいだろう。近年まで鍾乳洞の内部に千手観音像を本尊とした小社殿が安置され、それが「金武宮」であったという(『金武区誌 上巻』)。金武における観音寺の位置は、海岸部の富花津から丘陵台地の斜面をニキロばかり西方に登った標高五〇〇〜六〇メートルの台地の端にある。そのあたりは古く金武集落の中心部であったと思われる、観音寺のそばには金武グスク・神アサギ・祝女殿内(ヌンドウルチ)など古来の聖所が存在する。『琉球国旧記』の「既にして上人、地を金武村に拵び、小宮を創建す」に対応するところだが、海岸の富花津から高みにある集落の中心部へと移動し、そこにあえて地を拵んで宮を建てたところには、日秀の布教の意志を感じることがができる。

以上、「縁起」の文章を一通りみてきた。一般に清浄な山・湖(池)・洞窟などがフダラク山たるに不可欠な自然的要素であるが、この「縁起」でもそれが論われ、しかも山や湖の形容は森羅万象を仏性の現れそのものとみなす密教の教理によって肉付けされている。また洞窟の霊奇が強調されているが、観音の縁起類に洞窟がその住処や示現の場所とされることは多い。「顔炎は人に過ぐ」と『開山日秀上人行

状記』にはあったが、事實は「前期無く」(「縁起」)ともあるように、日秀は瀕死の状態でも金武に漂着し、地元の人々に助けられて蘇生したようなことだったかもしれない。しかしその精神においてはただフダラク願求の一念に純化した日秀の目にまで届いただろうその体験は、日秀にとって決定的であった。漂着まもなくの日々、彼は震えるような宗教的法悦にひたされ、奇跡の涙にむせびもしただろう。観音の導きによって、志したとおりフダラクに到達できたのだから。そしてその時に味わわれた深い感動は揺るぎない確信となって日秀の内面に深く刻印され、以後の人生において自己を「補陀落渡海行者」と規定し、それをエネルギーの源泉として数多くの利他行に励むことになる。「縁起」の文章が日秀の肉声を伝えているかどうかはともかく、金武漂着の折の日秀の全身的な感動やそこをフダラクと観じたことのみは疑えない。

ところで、やや微妙だが、「誠に補陀落山たることを知る。又何所に行き、之を求めんや」という表現には、一抹の逡巡とその否定という日秀の心の動きもひそんでいないか。幸いに南海の島に漂着できたが、そこは琉球国であった、ここをフダラクといつてよいのかどうかという逡巡、そしてその強い否定。いったい、「終に補陀落山に趣かんと欲す」として彼に目指されたフダラク山とはどの山だったのか、とあらためて問われる。

これについて『三国名勝図会』は、「補陀落山は、印度の海上にあり、又漢土浙江省の東洋中にあり、日秀の到れる補陀落山は、何れの地なりしにや、詳ならず」としながらも漢土の普陀山について紹介している。もともとこの書では日秀はいつたん補陀落山に到り、その帰途琉球に漂着したことになっている。それは誤伝だとしても、当時の日本における一般的なフダラク観を考慮するなら、日秀が中国の普陀山を目指した可能性はたしかにあるだろう。しかし、仮にそうだとすると、彼は琉球に漂着してそこをフダラクと観じたので、そこから北西方七百公里ほどの海上にある普陀山への渡航をあらためて試みようとした形跡はない。すなわち、中国の普陀山行が彼の絶対的な目標であったとも思われないのである。

結局彼は、これも当時一般的な観念だった、漠たる「南海のかなたのフダラク

山」を目指した蓋然性もつとも高いと考えられる。行者たちは厳しい修行を行い、観音にひたすら祈った。それが観音の受納するところとなってはじめて渡海することができた。そして渡海そのもの、漠たる「南海のかなたのフダラク山」への到達は自力によるのではなく、観音によってこそ導かれると信じられていた。一葉の小船で大海に乗り出すという第三者の目にはとてつもなく無謀な行為は、そうしたひたすらな修行と熱い信仰心にささえられていたのである。日秀に到るまですでに長い歴史を経ていた伝統的なタイプのフダラク渡海は、そのようなものであった。だから日秀においても、長い漂流の果て、うつろ舟が漂着した場所こそが観音の導きによる、観音いますフダラク山にちがいがなかった。そこにおいて彼の主観は観音を発見し、周囲の自然にフダラクを感得していった。そこはたしかに琉球国の一方にちがいがなかったが、彼にとつては観音によって導かれたフダラクにはかならず、そこに矛盾はなかった。いや、矛盾は彼の宗教的感情の昂揚の中でみごとに止揚されたはずである。「誠に補陀落山たることを知る。又何所に行き、之を求めんや」という表現には、そのような日秀の心の過程が反映されていると読めなくもない。

さて、日秀が琉球の金武に観音を発見し、その自然にフダラクを感得していったこと、それを彼自身の個人的な宗教体験と評すべきだろうか。日秀がフダラク渡海行者として生き残ったことはたしかに稀有なことであり、金武の自然との出会いも運命的であつたらう。しかし、ある場所に観音の霊地を見出していくという宗教的な営み自体は修験者・密教行者の伝統の上に立つものだったとみられる。

たとえば日本における神仏習合の初期、古く八世紀の泰澄は、「諸の神社に向ひて、その本覚を問へり」(『本朝神仙伝』巻三)という手法で加賀の白山や肥後の阿蘇山に十一面観音・千手観音を露骨に「祈りだし」ていった。同じ世紀に二荒山(日光山)をフダラク化した勝道も、同様な側面をもつ。以後の時代も、山岳を抖擻し、海辺で修行する修験者や密教行者たちによって観音の霊地が見出された例は数多くある。金武における日秀の劇的な営みもそうした系譜に立つものであり、この点を個性的であると強調する必要はなさそうだ。日秀も、高野山で修行し、熊野三所権現を奉じ、各地で石刻を含め多くの造寺造仏を行ったというその事跡に明ら

かなとおり、修験者・密教行者としての性格を濃厚にもつ僧であった。

五 「神人來たる」

日秀は金武にフダラクを発見し、熊野権現の正体たる弥陀・薬師・正観音の三尊を自ら刻み、宮を建てて安置し、金峰山補陀落院観音寺を創始した。しかし、突然海のかなたからやって来て仏像を刻み、寺を造り始めたこの日本僧を、金武の人々ほどのように遇したのだろうか。「魚鳥をあたゑなとしけれども不喰、又美女をあはせけれども精進看経斗也」と日秀が精勵したこと、そして「久敷居る儘、詞通し」、言葉が通じるとともに人々に「仏法をすすめ」たことはたしかなことと思われる。

一五二〇、三〇年代の琉球。尚氏による全山統一より約百年、第二尚氏王朝三代目の尚真王の半世紀(一四七七―一五二六)に及ぶ支配もようやく終わろうとし、その子供の尚清王の時代にかかろうとしていた。尚真時代には中央集権制が確立され、前代からの東南アジア・中国・朝鮮・日本を相手どつた中継貿易も引き続きさかんで王国は富み、首里・那覇では国際的な文化も栄えた。仏教については崇仏の王だつた第一尚氏の尚泰久の時代(一四五四―一四六〇)に続いて興隆策がとられ、首里・那覇には多くの寺院が堂宇をつらねた。固有信仰においても聞得大君を頂点とする神女組織が確立され、村落のノロを支配下に置いた。それでも首里・那覇から遠い村落では、まだ都の繁栄をよそに自然にたよる零細な農漁業を生業とし、豊作豊漁を祈る祭祀を折目として一年がまわり、祭祀を主宰するノロや根神(にぶみ)を精神的支柱として生きていくといった昔ながらの暮らしが続けられていたことだろう。

『由来記』巻十五には金武村の御嶽として「中森」「トムツツイベ」が録され、「金武巫火神」や「神アシアゲ」で儀礼を行う「稲穂祭」「稲穂大祭」「年浴」「ミヤ種子」「十月竈廻」「麦大祭」「芋祭」「柴指」と、それ自体は琉球に一般的な豊作祈願・収穫感謝を中心とする年中祭祀もしるされている。オモロ(神歌)がさかんに歌われていた時代で、

一 おもる小太郎が 百歳御み神酒 差しよわば やぐめさよ 世神酒の

数

又 金武の世の主むしに 百歳御神酒ひゃくさいのみしやく

(卷十七・一。日本思想大系『おもろさうし』による)

という、金武の領主の長寿を祈る内容のオモロも、祭などで歌い継がれていたことだろう。そのような状況の金武に、一葉の舟で日秀は流れ着いたのである。

尚敬王の冊封副使だった徐葆光の『中山伝信録』(康熙六一年(一七二二)刊)の巻四、山西省金武間切「金武」の条に、

金武山在り。山上を金峰と為す。山下に洞有り。千手院有り。富蔵河有り。二百年前、日秀上人有り。海に泛びて此に到る。時に年大いに豊かなり。民謡ひて云く、「神人來たる 富蔵の水清し 神人遊ぶ 白沙米に化す」と。日秀上人、波上に住むこと三年、後北山に回る。

とある。日秀が漂着して活動を始めると、大豊作になったという。そこで人々は日秀を讃え、歌った、「神人が来た、すると富蔵川の水が清んだ、神人が神祀りをした、すると浜の白砂が米に変わった」と。ここには素朴に、海のかなたから訪れて豊饒をもたらした日秀に対する村人の驚きや感動が歌われている。仏教で「神人」は仏の称でもあるが、ここは琉球の言葉で「神人」の謂である。「神人遊ぶ」では、日秀の熊野権現を祀るなどの信仰的宮為が村の神女らの神祀りの行為になぞらえて眺められているようだ。

『金武町の民話と伝説』には「日秀上人」という題で、長く口承されてきたらしい金武での日秀伝承が載せられていて興味深い。「一、上人フナヤに漂流」「二、大蛇退治」の二部に分けられているが、その一部を抜書きしてみると、「一、上人フナヤに漂流」では、

永正年間(一五〇四〜一五二〇)、和歌山から唐にいく途中の一隻の舟が、金武のフナヤ(富花港)に流れついた。……ちようど舟が流れついた頃、ヤマクモーに仕事をしに来ていた並里の若者がいた。……ほとんど半壊状態の舟、その帆柱は根こそぎに折れてなくなり、へさき(舟首)はもろにもぎとられ、舟の思かげはなくなっていた。若者が乗り込んでよく調べてみると、舟の中央部あたりに、上から板をかぶせた細長い箇所があった。板を取り払ってみる

と、かろうじて生きているかのような坊さんが、舟底にしがみつ、うつぶせになって倒れていた。「これはいかん。すぐにも手当てせねば」と若者は持っていた弁当をあたたため、オカユを作って差し上げた。オカユをすすっているうちに、坊さんの体力は回復したようで、立ち上がって海を見渡した。そして、笑みをいっぱい浮かべて大きな声をはりあげた。「ほこらしやみなとー!」とあって、漂着者を発見した村人の驚きと扶助のありさま、また上人の喜び(「ほこらしや!」)が親しげな民話の口調にならして目に見るように語られている。波静かな金武湾を望むのどかな福花の海岸に立つと、五百年近く前にそのような小事件も現実にあったのだらうと思えてくる。たしかに村人の扶助と敬意がなければ、漂着者は生き延びることさえおぼつかなかったのではないか。

そして「二、大蛇退治」の冒頭に、
 金武の若者に命を助けられた日秀上人は、村のために何か役に立ちたいと考えていた。上人は農業についても相当な知識があったといわれ、農作物の栽培や管理、特に稲作については、それまでは経験だけを頼りにしていた村人に新しい方法を教えた。その成果の素晴らしさに村人は皆びつくりし、「白砂が米に化した」という謡まで歌われるようになった。上人の指導のおかげで、村は豊作がしばらく続き、たいへん栄えていたという。それ以来、村人



大川(ウツカガ)

は日秀上人のことを、神人だとあがめるようになった。

とある。日秀が助けられたお札に地元の人々に稲作などの農業指導を行ったので豊作が続いたというので、先の「神人來たる 富蔵の水清し 神人遊ぶ 白沙米に化す」という歌の具体的な説明ともなっている。この話の後には、洞窟の中に住んで娘の生胆を常食にする恐るべき大蛇を上人が呪文を唱えて洞窟の中に封じ込めた、という話が続いている。この大蛇は、その洞窟に続いているといわれる大川（ウツカガリ。数多い金武の井泉の中でも代表的な、湧出量の多い井泉。観音寺の洞窟から六〇メートルばかり東にある）で水汲みの娘を襲ったり、農作物を荒らしたりした、ともある。同じ伝説を載せる『金武町誌』では、この大蛇の住む洞窟は「金武の洞穴」であり、上人は、弥陀・薬師・観音の三像を彫刻して洞穴の前に安置し、呪文を唱えて大蛇を洞穴内に封じ込めた、そして上人はそこに院を建てて居住するようになった、これが金武観音寺の起源である、としている。

金武ではこうして日秀は豊饒をもたらし、大蛇を調伏した「神人」として伝えられてきた。僧侶と豊饒は一見つながりにくいようだが、しかしそうではない。密教が受容される過程では、中国でも日本でも僧侶の呪術的能力（験力）が期待され、早魃には僧侶による祈雨の儀礼が行なわれた。また、日本各地の山や海岸で観音信仰・フダラク信仰は龍神信仰と深い関係をもちながら定着していった。伝説中の大蛇は威力ある水神・龍神であり、日秀がそれを封じ込めたというのは、那智山中には観音の力で巨大な神龍が封じ込められているという伝承とも軌を一にして、やはり水をコントロールして豊饒をもたらす呪術者の姿がある。なお、『遺老説伝』巻一には、「仲城郡糸蒲」の「糸蒲寺」の菜園から田芋の生産が始まり、やがて国中に栽培されるようになったとする説話がみえ、琉球における寺と農業生産の関係を示唆している。ちなみにその寺の菜園で田芋（田で栽培するサトイモの一種）の栽培を始めたのは寺に仕えていた金武村の人だとあり、現在も田芋は金武の名産物になっている。

「神人」は琉球の村落では一般にノロ・根神など村の神役を指す言葉である。祭祀の中で、ノロや根神（いづれも女性）は村落の宗教者の代表として村落の聖所に神を迎えて祀り、神と村人とを仲介して村落に繁栄をもたらす重要な存在とされて

きた。金武の人々にとっては日秀もまた海のかなたからやって来て神と人を仲介し、豊饒をもたらす「神人」にほかならなかったわけである。そのような受容の大地には、後にもふれるが、海のかなたに理想郷を思い、そこからこそ神がやって来ると信ずる琉球の固有信仰が存在したと考えられる。金武でも古来のニライカナイ信仰の残存が多少観察される。『由来記』に金武村の御嶽として「中森」「トムツツイベ」が記載されていることは先述したが、これらの御嶽の香炉は東方に向かって拝むようにしつらえられ、それはニライカナイの方向だという（『金武町誌』）。また、金武町の南に突き出た金武岬にあるカミムイは海のかなたからやって来る神がいったん休む場所だと伝えている。その他、六月ウマチー（豊年祭）における綱引き行事や八月の十五夜遊びに演じられて人気のある「長者の大主前」にも来訪神が豊饒をもたらすという信仰を見出すことができる。

『中山伝信録』巻五に、当時首里や那覇で行われていた仏教について、「釈に臨済宗真言教の二種有り。臨済宗は禪門と為し、礼誦の外多く詩を為るを学ぶ。真言教は人の為に祈禱し、符呪を書す。正五九月に尤も多く福を祈る」とある。臨済宗が主に支配階級に信仰され、対して真言宗が祈禱・祈福とより生活的民衆的なものとして受容されていたことが知られる。日秀の場合も高邁な仏教理論によってではなく、より実践的に、その真言密教僧、また修験者としての験力をもってまずは生活的民衆的なレベルで金武の人々に受け入れられたことはまちがいない。

日秀はそうして金武に定着し、その後には国王に招かれて首里・那覇に進出し、波上三所権現を再興するなどして活躍した。ここで、そうしてフダラク渡海僧、日秀が琉球の地で人々に受け入れられ、活躍できた背景についてあらためて考えてみたい。三点ほどにまとめてみよう。

一つには、琉球にはすでに日秀以前に熊野権現信仰が流入していたことである。袋中上人の『琉球神道記』（一六〇八年成立）には「当国大社七処アリ。六処ハ倭ノ熊野権現、一処ハ同ク八幡大菩薩也」として当時すでに熊野信仰の盛んであったことを伝えている。六処の熊野権現とは波上・洋（沖）・戸棄那（識名）・普天間・末吉・天久の各権現社をいう。また『琉球国由来記』（一七一三年成立）巻十一によれば、波上山護国寺は十四世紀後半ごろ、冲山臨海寺・天久権現は十五世紀後半

ごろの開基といい、またそれぞれの権現が真言宗の寺院と一体化している点も注意される。宮家準氏も「琉球八社(以上の七社に金武権現を加えた八社。論者注)のうち七社を占める熊野権現は、いずれも琉球王朝時代臨濟宗と並ぶ沖繩の二大宗派の一つであった真言宗寺院と密接にむすびついて十五世紀後半から十六世紀ころにかけて沖繩に勧請されたものである」と述べるように、十五世紀ごろには熊野信仰が琉球にもたらされ、真言宗と一体化して王城の地を取り囲むように首里周辺に次々に定着していったとみられる。それは日秀の信仰が受容される素地の一つとなつたにちがいない。

二つには、フダラク渡海僧の史実あるいは伝承がすでに日秀以前に存在したことである。『琉球国由来記』卷十序文には、古く咸淳年間(一二六五―一二七四)のこととして、「禅鑑禪師」なる僧が「葦艇舟」に乗って飄然と小那覇津に到つたことを伝える。「俗に其の名を称はず、只補陀落僧と言ふ。蓋し朝鮮の人か、且つは扶桑の人か。世遠くして、詳らかに考ふること無し」。時の英祖王はこの漂着僧を重んじ、精舎を当時の王の居城であった浦添城の西に建てて居らしめた。その寺を「補陀洛山極楽寺」と名づけ、そしてこれが琉球国への仏教伝来の初めだといふ。「補陀落僧」「補陀洛山極楽寺」という言葉といい、その漂着のしかたといふ、この禅鑑もフダラク渡海を試みて琉球に漂着した可能性がある。また別に、『由来記』卷十四には中城間切津覇村糸蒲にかつて存在した真言宗寺院の住持と土地のユキヤという巫女の交流を語る説話がみえる。その住持は「補陀落坊主」と呼ばれた。同話を伝える『遺老説伝』卷一には「其の名を知らず。但々補陀落僧と呼ぶ」といふ。古老の伝えであるといふ、いつのこととも知れないが、「補陀落坊主」「補陀落僧」は禅鑑の場合と同じ呼称であり、真言宗の僧侶であったという点からもこの僧もフダラク渡海行者であった可能性がある。以上の二例は多分に伝承的要素を含む。しかしこれらからは逆に、長い時代にわたって海島国琉球には異域から多くの人々が漂着したが、その中にはフダラク渡海行者もいくらかはいたことが推測される。琉球には、日秀以前にフダラク渡海行者の漂着、受容の先例があったのである。

三つには、先にもふれ、また以上の二点とも関係するのだが、琉球には外来の信

仰を受け入れる基盤として伝統的な他界観・来訪神信仰が存在したことである。ニライカナイ・ニルヤカナヤあるいはニールラスクなどと呼ばれて(以下、「ニライカナイ」で代表させる)、海のかなたや海底・地底にあらゆるものの根源たる他界が存在するという基層的な信仰が全琉的に存在することについてはここであらためていわないが、そのような他界観、そしてそこから神が来訪して幸いをもたらすという信仰とその実践としての儀礼は現代沖繩に存続する各地の古祭祀でも顕著に観察されるところである。来訪神は祭祀によって目に見える仮装神の姿をとったり、神女に憑依するかたちをとったりするが、いずれも五穀の豊饒や村人の幸福などを含む「ユー」(世)をもたらししてくれると信じられている。しかもニライカナイは死者のおもむく国とも観念され、来訪神は祖霊神と考えられている場合も多い。そして、琉球の人々が外来信仰を受け入れる場合にもこの他界観や来訪神信仰こそが基盤となつたので、先述の熊野権現信仰の受容も、宮家準氏がすでに説いているようにそうしてなされたと考えられる。その受容のありさまは、可視的には信仰形態に観察される。『琉球神道記』では尸棄那・普天間・天久の各権現が洞窟を聖所としているとある点に注意されるのだが、この点についてもすでに宮家氏がより多くの事例から「沖繩の権現社は多くの場合洞窟を本殿とし」、「中に他界神の性格の強いビジルと呼ばれる石をまつるといふ形態をとることが多い」と帰納している。信仰形態において熊野権現信仰とニライカナイ信仰の両者は類似するのであり、したがって習合しやすかつたのである。そこから敷衍すれば、熊野権現信仰を受け入れた琉球の人々にとって、はるかかなたの熊野は権現の故郷、一つのニライカナイであり、熊野権現は威力ある来訪神であつたわけだろう。しかも、習合のためには信仰形態ばかりではなく両者の信仰内容の類似も重要であつた。現当二世にわたる人間の救済をかかげる熊野権現信仰は、その信仰内容においてもニライカナイ信仰とひびき合ったはずである。

熊野権現信仰とニライカナイ信仰の類似、習合の様相は、琉球における観音信仰とニライカナイの信仰の関係についてもほぼそのままあてはまる。つまり、琉球の人々にとっては観音も他界から来訪した神であり、その住所たるフダラクも一つのニライカナイだったのである。「補陀落僧」の「補陀落」という言葉は、琉球で

は、「ユー」をもたらすニライカナイと類似のひびきをもっただろう。

六 「補陀落僧」として——布教とその後

『遺老説伝』（一七四五年ころ成立）巻三には、また一人の漂着僧の伝承がみえて
いる。

往古、僧あり、粟国島に漂至す。島の北の洞中を見るに、磐石立ちて、略々仏
像に似たり。乃ち謂へらく、以て阿弥陀・薬師・観音の三仏と為し、而して崇
びて奉供を致すべしと。遂に身を此の洞に寓して居る。後、洞中に死し、首を
西にして化す。故に其の髑髏、石に化して西辺の石壁に付き、今猶ほ省形髑髏
如し。其の余の骨骸、化せずして少しく存する者有り。又其の用ふる所の竈石
三塊・螺鍋一口も、亦化して石壁に付き、猶ほ亦其の形有り。是を以て、洞を
叫びて寺と為し、而して正・五・九等の月に、島人洞中の仏前に詣り、福を祈
ると云ふ。¹⁶⁾

粟国島は那覇の北西方約六十キロの海上に浮かぶ面積八平方キロほどの小島であ
る。『由来記』巻十七には九つの御嶽をはじめとして年中行事がしるされ、中でも
旧暦六月の「ヤカン祭」について詳しい。この荒ぶる来訪神を迎える島で最大の祭
（「ヤガンウユミ」「ヤガンウフウイミ」ともいう）は、現在も神女たちを中心に敬
虔に行なわれている。¹⁷⁾ 三百余年前に「観音の碑」が島に流れ寄ったのでそれを祀
り、以来そこに健康祈願・旅の安全祈願をするようになったという観音堂も島の南
東部の海岸にある。¹⁸⁾

そのような島に漂着したこの僧は、北の洞窟に立つ磐石に阿弥陀・薬師・観音の
三仏を見出して崇めたという。鍾乳洞の石筍が仏の形をしていたのである。鍾乳石
や石筍の中にはたしかに仏像のかたちに似るものがあった、現在の金武観音寺の洞
窟内にも「こけし観音」「十六羅漢」「大仏天蓋」などと名づけられている形状のも
のがある。さて「阿弥陀・薬師・観音の三仏」とあるので、やはりこの僧も熊野信
仰の奉持者であり、「補陀落僧」だった可能性がある。けれどもこの僧の場合には、
その洞窟で暮らし、ついにそこで西向きに身を横たえて入寂したという。日秀

のように王国の中央に出て国王にも重んじられ、琉球仏教史上に大きな足跡を残す
といういわば派手な活躍をしたというのでは決してなかった。俗な見方では、地味
で寂しげな人生だったといえるかもしれない。しかし辺陲の島の洞窟で信仰に生き
たその長い日々、その繰り返しの日常を思うとき、信仰者としての純粹は疑えな
い。その髑髏は石と化し、石灰岩の壁にくっついた。髑髏の怪といえば、『日本靈
異記』下巻第一縁にみえる、熊野山中の崖で捨身したが髑髏になってもその舌一枚
残して法華経を誦え続けていたというすさまじい法華行者を連想せずにはいられな
い。行者としての信仰の純粹さ、激しさにおいて両者は通ずるだろう。

だがこの僧の場合も、日秀と同様、島の人々には尊崇されたい。僧の髑髏の
残る洞窟を島人は「寺」（テラ）と呼び、その髑髏の前で定期的に祈福するように
なったという。そのことからすれば、生前からも僧は、やはり他界からやって来た
威力ある「神人」として島人に崇められていたのだ。このテラの信仰は今に存続し
ていて、『粟国村誌』には、

粟国島の北海岸近く、俗称洞寺上原に福木、桑、シダ等の雑木が密生してい
る所に洞寺がある。島の人は皆洞寺と呼んでいる。この寺の由緒はさだかでは
ないが、今から二百年程前に雲水和尚と言う僧侶が渡島して、この洞寺で読経三
昧に過ごしている中に此処で亡くなったと言われ、頭の化石が現在まであって
祭られている。（中略）今でもその和尚さんと知り合った牛飼いや洞窟近くの
畑主の子孫の方々が、洞窟門参りと称して旧正月、九月には主として拝むよう
になっているとのことである。

とある。現代の島における由来伝承では那覇の寺院からやって来たという「雲水和
尚」の逸話に結びつけられているようだが、このテラが『遺老説伝』の「寺」であ
ることにまちがいはない。その鍾乳洞は、島の北端の崖下にあるヤガン御嶽の南五
百メートルほどにある。ヤガン御嶽はヤガンウユミの時に集落内のイビに迎えられ
祀られる神の居場所とされ、昔は祭月の六月にはその神が荒れて「テラやヤガン原
の辺りの畑へは迂回しないと行けないくらいだった」（『粟国村誌』）と、集落の北
方に位置するテラとヤガン御嶽を畏怖すべき神の場所として一体視するような伝承
もある。なお想像の域を出ないものの、僧がわざわざ集落からは遠い洞窟に住んで

熊野権現を祀った目的は、日秀が洞窟の大蛇を封じ込めたように、島人に畏怖される御嶽の荒ぶる神の調伏にあったのかもしれない。いずれにしても、この辺陲の島で信仰に生き、髑髏を崇拜されたこの僧は、漂着、熊野信仰、洞窟信仰、そして人々とかかわる姿などの類似においても一人の日秀であったともいえ、しかし日秀とはちがって目立った活動はすることなく生涯を終えたのだった。そうした意味では、この僧のあり方は日秀を評する場合の一つの視点を提供しているだろう。

おそらくは熊野那智から琉球の金武に漂着した日秀は、そこをフダラクとみなし、その確信は一生揺るがなかった。「金峰山補陀落院観音寺縁起」はその確信に至る過程を生き生きとものがたり、「日新公御譜」の自署に近い「本願日秀上人從補陀洛來作之」はその何よりの証拠であった。人々は彼を「補陀落僧」と呼んだだろう。その場合、「補陀落」は二重の意味をもっていた。目指され到りついたフダラクと、ニライカナイに重ねられた海のかなたのフダラクと。この呼称において渡海者の信仰と渡海者を受け入れる側の信仰とが共振しているのであり、そのことも実践者としての日秀の確信や自信を深めたにちがいない。

金武での活動後、日秀はいつのころか国王に招かれ、首里・那覇に進出、波上山三所権現の再興など造寺造仏・布教・人々の救済などに専心したようである。その後日秀はなぜか「然して其の身を夫の国に終ふことを欲せず」(『日新公御譜』)、薩摩に渡り、そこでも島津氏の帰依を受け、勸進聖としても大いに活躍した。けれども、日秀の生涯全体を眺めるとき、琉球での活動年代についてはなおふたしかであるとはいえ、渡海・漂着というドラマを経て、フダラクを見出し、壮年時の長年を費やして布教に燃え、救済に尽くしただろう琉球時代こそが日秀のもっとも昂揚したときではなかったかと私には思われる。ただ同時に、固有信仰の根強い琉球で、日秀は思い通りの布教活動ができたのだろうか、とふと疑いもきざす。ここまでは熊野権現信仰や観音・フダラク信仰の受容のありさまについて固有信仰との類似・習合、そして「共振」を強調してきたけれども、他方では往時首里・那覇に寺院が栄えたなどの外面のはなやかさはともかく、「沖繩では固有信仰が強かったため、仏教は民衆の中に浸透しないままに終わった。沖繩の農村には寺院は皆無の状態であり、檀家制もついに成立しなかった」といわれるように、全体としては仏教

の浸透度が低かった琉球の宗教史をかえりみないではいられない。金武の観音寺の信仰については地元でも、「村人の仏教観というのは、特定の宗教としての仏教を信仰し、その檀家、信徒として仏門に帰依していた人は殆どいなかったようである。だが、仏さんを拝めばご利益があるものとは信じていた」(『金武区誌』)といわれている。またニライカナイ信仰が本質的にもつらしい生についての肯定的な明るさ、それに対して熊野権現信仰が本質的にもつらしい死のかけの暗さ、深さ……しかし、日秀の信仰や人間的情熱が時の琉球の人々の内面にどの深さまで届いたかなどということは、今となつてはほんとうには知られないことがらに属しよう。

深く入り込む錦江湾の最奥部、鹿児島県霧島市隼人町にある日秀神社は、日秀が再興勸進に尽くした鹿兒島神宮(旧、大隈正八幡宮)の北西、朝日山の緑の中にひっそりと佇ましている。もとの「金峰山神照寺三光院」で、日秀が創建して求め持法の道場とし、晩年をすごした寺である。境内には阿弥陀堂や日秀が刻んだと伝える素朴な石仏群(三十体観音像)が残されており、また裏手には日秀の入定跡と伝えられる岩場が今は崩れてある。三年間に及んだその入定と入寂のようすは人々に強い印象を残したようで、伝記類に特筆されている。「日秀は補陀落渡海とともに入定という二つの捨身行を実践したのである」と根井浄氏がいうように(『補陀落渡海史』)、日秀はいわば生涯に二度の宗教的自殺を経験した人だ。若年時には殺人の



日秀神社(隼人町)

罪も犯したことがある。時代の影響も大きかったわけだが、日秀において死は常に身近にあったろう。だからこそ二つの死の間の生は「補陀落僧」として、観音の従者のようにして現実の中に立ち混じり、人々の救済・抜苦・利生のためにひたすら奮励したといえるのかもしれない。二度の捨身行にもまた当然、自らの救済のみならず利他の願求が含まれている。苛烈な時代に、そのような烈しい生き方をした一人の信仰者の姿が浮かび上がってくる。

神社は南面し、その長い参道からは錦江湾がよく望まれる。「当寺は正八幡宮の後山にありて、前は南海を目下に尽し、桜華岳を席上に収め、沿海の連山・広田、遠近布列して、其眺望佳絶とす」(『三国名勝図会』)。その山号、「金峰山」は金武の「金峰山補陀落院観音寺」を思わせ、院号「三光院」は那覇の「波上山三光院護国寺」を思わせないではおかない。根井氏もふれているように、三光院の建立やそこでの修行は、琉球時代の活動やその記憶につながるころがあったろう。また、日秀は錦江湾にもまつわって不思議な逸話を残した。大隈正八幡宮再建のおり、「上人其良材を求めんと欲し、独り扁舟に乗じて、南海の屋久島に至り」、良木を撰んで「限州正八幡宮材木」と大書して山中の大河に流すとたちまち雷雨、洪水となり、不思議にも三日後、その諸材木は錦江湾の奥まで流れ寄ったという(『三国名勝図会』所引、「日秀上人伝記」)。錦江湾の海はそうして日秀にとって確実に南海とつながっている海路でもあったろう。三光院からはしばしば、その海の眺めを通して南海のフダラクを思ったにちがいない。

注

- (1) 『鹿児島県史料旧記雑録後編一』所収。調点を付した。
- (2) 寛永年間(一六二四～一六四三)から元禄四年(一六九一)の間に成立。東京大学史料編纂所蔵『神社調』所収、根井浄『補陀落渡海史』に訓読して翻刻。
- (3) 寛永年間以降成立。日秀神社所蔵。藤浪三千尋編「資料・『日秀上人関係文書』」(『鹿兒島民俗』九二、一九八八年)、および根井浄『補陀落渡海史』に訓読して翻刻。
- (4) 伊藤聡「渡琉球僧の物語——特に日秀上人をめぐる——」(『文学』九一三、一九九八年夏)はやはり諸史料を検討して日秀の在琉時期を「嘉靖十年代二十年代にかけて」としている。
- (5) 琉球史料叢書本によったが、適当に改行し、一部句読点を改めた。

- (6) 参考、金武区誌編集委員会編『金武区誌 上巻』(一九九四年)、金武町誌編集委員会編『金武町誌』(一九八三年)。
 - (7) 参考、宮家準「遊行宗教者 山伏の跡を求めて」(窪徳忠編『沖縄における外来宗教の伝播と受容』所収(一九七八年))。
 - (8) 「密教の行の基本は、三密の一体化した瑜伽行にある。行者が本尊の前に坐し、さまざま前行を修しおえたのち、口に真言を唱え、手に印契を結び、心を一点に集中させて、本尊を観想し、両者が一体化して融け合う。このようにして行者は肉身をもったままで、現世において悟りを得て、仏となる。このことを即身成仏という。……行者の最終目標は、即身成仏にあるといつてよい」(松原長慶『密教』一一七頁、一九九一年)。
 - (9) 「修行とは修生菩提心の発起によりて正しく三密の妙行を修する位なり。此修行によりて理智の二徳を得、これ証菩提と入涅槃となり、菩提は智にして涅槃は理なり」、「本修合論の五転は本覚下転門の五転とも云ふ、中東南西北と次第し、中央を本有の菩提心とし、東方修行・南方証菩提・西方入涅槃・北方方便究竟とす、これ中因発心の義なり」(『密教大辞典』)。余説になるが、後年日秀は「五点般若に随ひて」、「方便究竟」のために北方の薩摩へ移動したのかもしれない。
 - (10) 根井浄『補陀落渡海史』附録の翻刻による。
 - (11) 並里区誌編集委員会編『並里区誌』(一九九八年)。
 - (12) 明和三年(一七六六)の刊本により、訓読した。
 - (13) 金武町教育委員会編『金武町の民話と伝説』(一九八九年)。
 - (14) 宮家準『増補日本宗教の構造』第五章「宗教の伝播と受容——沖縄の神社信仰——」(一九八〇年)。
 - (15) 注(14)の論文。
 - (16) 嘉手納宗徳編訳『沖縄文化史料集成6 球陽外巻 遺老説伝』(一九七八年)による。
 - (17) 参考、武藤美也子・高阪薫「粟国島ヤカウユミ」(高阪薫編『沖縄の祭祀』所収、一九八七年)。
 - (18) 粟国村村史編纂委員編『粟国村誌』(一九八四年)。
 - (19) 宮城栄昌『琉球の歴史』八〇頁(一九七七年)。
- 付記：本稿は平成十七年度科学研究費補助金(基盤研究(C))。研究課題名「東アジアにおける補陀落信仰の研究——日本を中心として——」による研究成果の一部である。

About “Nisshushounin” and his Expedition to Fudaraku

KANNO Tomikazu

Abstract : In the sixteenth century, there were people who tried to reach Fudaraku, the place where Kannon lives, by boat. Among these people there was a monk named Nisshu. It was very difficult to cross the sea at that time, but fortunately Nisshu reached Ryukyu. After having established his beliefs there, he went to Satsuma. In my opinion, he was convinced that Ryukyu was Fudaraku.

In this essay, I have written about his life and thought, especially his experience of reaching Ryukyu, and the local people who accepted him.